

一人でも多くの人に楽しい生活を

(氏名・学校名非公表)

「いじめをするのはダメ。」人権について考えると、みんな口をそろえて言います。しかし、いじめはなくなりません。

私は小学校の頃いじめを受けていました。低学年の頃は筆箱に「バカ」「死ね」という単語が書かれ、中学年になると私服をトイレに捨てられ、高学年になると五～六人の女子から無視をされました。このようないじめは一回だけ行われたのではなく、何十回も行われました。私はその度に胸がグッと締め付けられる感覚を味わいました。毎日学校に行くことが苦痛でした。相談することも少しずつ怖くなり、一人で考えては泣きを繰り返していました。そして、人と話すことが大好きだった私は人と関わることも怖くなりました。「またいじめを受ける」「みんなから嫌われる」そうやって私はどんどんネガティブになっていきました。

そんな私にいつも寄り添ってくれる年下の親友がいました。彼女は不登校でしたが、私が相談をすると「そんなの放っておこう」「大丈夫！他にも友達がおるじゃん」「おいしいもの食べに行こう」などいつも前向きな言葉をかけてくれ、いじめを受けていることを忘れさせようとしてくれます。そんな彼女の支えがあり、私は少し学校を休みがちではありましたが、小学校を卒業しました。

中学生になると、私をいじめていたグループのリーダー的存在の人は他校へ入学したため、私は少しほっとしました。しかし、私は人と接することを怖く感じ、おびえながら人と関わっていたので、本当に信頼できる友達がありませんでした。けれども、私が中学校で出会った友達は優しい人、面白い人、助けてくれる人、私を友達として受け入れてくれる人など、とてもすてきな人たちでした。最初は新しい友達との関わり方に苦戦したこともありましたが、今では毎日楽しく学校に行っています。友達とケンカをしても互いに謝り、また仲良く遊ぶ。そんなことを繰り返して、私はありのままの自分に出会い、友達の大切さを学びました。

私が中学三年生になると、年下の親友が入学してきました。彼女は不登校ではなくなり、ほぼ毎日学校に来ています。しかし、中学生になると一番難しい上下関係に苦戦しています。私も彼女が悪口を言われているのを聞いた瞬間、過去のことがすべてよみがえってきました。彼女に寄り添ってもらったあの瞬間も。私は彼女への恩返しのため、勇気を出して言いました。

「それいじめだよ。私の親友は傷ついているよ。」

この言葉を言うのにとってもドキドキしました。親友をいじめていた人は、自分の言葉を受け入れ、自分がいじめをしていることを理解してくれました。すると、彼女に対するいじめもなくなりました。

いじめは毎日どこかで起こっています。自分も気づかずに誰かをいじているかもしれません。いじめを受けている人を見て見ぬふりをしているかもしれません。だからこそ、自

分自身の行動を振り返り、周りを見て苦しんでいる人がいれば、まずは声をかけることをしてほしいのです。「どうしたの?」「大丈夫?」と。いじめを受けている人からすると、誰か一人でも寄り添ってくれるととても気持ちが楽になります。私がそうだったように、そして年下の親友がそうだったように。先生に相談すると助けてくれますが、先生よりも友達に助けられた方が何十倍もうれしく思います。

私は自分の経験を通して、一人でも多くの人々が毎日楽しく生活できるように一人一人がいじめをなくす努力をすることが大切だと思います。軽い気持ちなどで「いじめをするのはダメ」と言うのではなく、もっと深く人権について考えてほしいです。一人でも多くの人々が楽しい生活を送れますように。そんな願いを込めて、私はこれからも「どうしたの?」「大丈夫?」と声をかけ続けていきたいと思っています。